

有識者に聞く。



多様なステークホルダーとの
コミュニケーションツールとして
世界大学ランキング日本版に期待

文部科学大臣補佐官
鈴木寛

すずきかん ●東京大学法学部卒業後、通商産業省に入省。慶應義塾大学助教授、参議院議員、文部科学副大臣などを経て2014年2月から東京大学公共政策大学院教授、慶應義塾大学政策・メディア研究科教授。2015年2月から現職。

世界に目を向ければ 高等教育の需要は増加

「全ての大学は、日本の高校生以外にも目を向けないと立ち行かない」――20年来言われ続けてきたことが、18歳人口がさらに減少する今後数年間で、現実となります。

一方、海外では18歳人口が劇的に増えており、高等教育のニーズが急速に高まっています。例えば中国では、1年間に70万人超の学生が他国に進学。インドは現状24%の高等教育への進学率を、65%に引き上げるという国家目標を掲げています。

そこで、受け皿となる大学が必要とされているわけですが、アメリカ型の高等教育モデルはコストが高く、一般層には手が届きません。その点、日本の大学は比較的

低コストであり、認証評価によって質保証がされていることから、世界の中ではポテンシャルが高い。THE世界大学ランキング日本版は、こうしたメリットを海外に伝えるツールになるでしょう。

また、トランプ新政権により研究に制限を設けられたアメリカの教員が、アカデミックフリーダムを求めて日本に来たがっているという話も聞きます。優秀な研究者を海外から招くツールとしても、日本版を活用できるはずですよ。

大学での学びの価値を 社会に問い直すべき

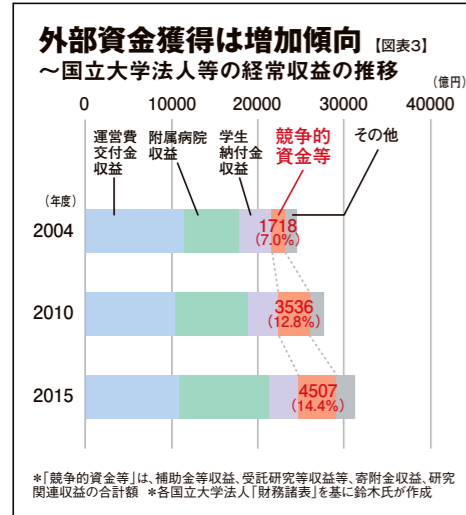
少子化が進むといえど、国にとっての高等教育の重要性は変わりません。「VUCA」の時代と言われる現在、思いもよらないチャンス

に1度は大学に戻り、2回、3回と学び直しをする社会が理想でしょう。「入学時の学力」一辺倒である評価軸や、「モラトリアム」とも言われる大学の存在意義を社会に対して問い直すときが来ているように思います。

指標として活用し 改革のPDCA強化を

文部科学省は大学の応援団として最大の努力を続けます。しかし国家財政は危機的状況で、支援には限界があります。文部科学省以外の社会資源の利用にも積極的に目を向けていく必要があります。

例えば日本経済団体連合会は、高等教育への投資を約束しています。地元企業が協力を期待する場面もあるでしょう。急成長してい



るアジアの企業も、イノベーションを支える知的、人的な需要を高めています。これら企業の大学に対するニーズは、既に競争的資金等の増加という形で現れています(図表3)。今後も継続的に企業などから資金を調達するには、彼らとのコミュニケーションが極めて重要です。それには大学業界以外の人にもアピールできるコミュニケーションツールが必要であり、日本版ランキングがその一つとなるでしょう。合意形成・説得・交渉のベースとなるエビデンスとしての活用が期待できます。

彼らとのコミュニケーションの前提としては、各大学の特色を前面に打ち出した教育・研究・社会貢献が推進されなくてはなりません。それには3つのポリシーに基づくPDCAサイクルの強化が不可欠です。特におざなりになりがちなかHECKとACTION、すなわち、モニタリング・検証・分析による戦略の組み換え・資源の再配分に力を入れるべきでしょう。ここでランキングを、その一指標として使うことができます。

ランク、スコアに一喜一憂するのではなく、大学を客観的に見つめるための素材として活用し、真の大学改革を推し進めていただくことを願っています。

受験生が大学を多面的・総合的に評価する時代に向けて

今回THE世界大学ランキング日本版の制作に協力したベネッセコーポレーションの責任者に、日本版の意義と今後の展望について聞いた。

Times Higher Education (THE) のランキングは、最も信頼できる大学ランキングだと考えています。このTHEの国別ランキングとして、アメリカに次いで世界で2番目に発表された日本版。その制作を、ベネッセグループがサポートしました。THE側に日本の教育事情を伝えるとともに、高校教員への評判調査を実施し、受験生や留学生の進路選択、大学での改革推進に役立つものをめざしてきました。

先行して発表された世界ランキング、アジアランキングでは、大学院における研究力が重視されていますが、アメリカ版、日本版は学部の教育力が重視されているため、ランクイン大学の顔ぶれが異なります

(株)ベネッセコーポレーション
大学・社会人事業本部
統括責任者
藤井雅徳

ふじいまさのり ●(株)ベネッセコーポレーション高校事業部にて高校の教育改革支援や海外トップ大進学塾「Route H」開発に携わった後、現職。THE世界大学ランキングへの協力や語学・留学事業を通じて大学のグローバル化を総合的に支援。

例えば日本版には、世界ランキングにはランクインしていない一橋大、国際教養大、国際基督教大といった大学が見られるなど、日本の大学の特徴が表れたランキングになったと自負しています。

THEによって世界に公開されたこの日本版ランキングは、海外の学生には新鮮に映るのではないのでしょうか。これまで留学先として学生を引きつけてきたのはアメリカやイギリスでしたが、これら2か国の保護主義的な政策転換が高等教育に与える影響は大きいと考えられています。日本に学生招致の大きなチャンスが訪れています。

一方、国内では入試改革による多面的・総合的評価の導入が進んでいます。日本版の指標が大学選びに使われるようになると、偏差値一辺倒の時代から、受験生側も多面的・総合的に大学を評価する時代になるのではないのでしょうか。

また、指標が多様化したことにより、「学部は教育熱心な大学に、大学院は研究熱心な大学に」というような「中身」に注目した進学先選びも可能になると思います。

